

言語学

◇教員◇

教授：西村義樹、小林正人

准教授：長屋尚典

専任講師：白井聡子

◇学生◇

学部：57名、修士課程：12名、博士課程：18名

(1) 言語学専修課程で学ぶこと

言語学専修課程では「言語」を研究対象とします。ではそれが、同じく言語を対象とする、文学的あるいは哲学的な研究とどう違うかという、言語学的な研究では、言語を科学的な研究対象として扱うことが求められるのです。すなわち、研究の結果は、客観的に検証できるような形で提示されなければなりません。これは、個々の言語を扱う場合でも、また、広く言語一般を扱う場合でも（その時にも個別言語のデータが基礎となりますが）、忘れてはならない大切な点です。

言語学専修課程進学に必要な条件は、言語について深く調べることに興味をもつことですが、研究対象として選ぶ言語に制限はありません。日本語・中国語・韓国語などのアジアの言語はもちろんのこと、英語・スペイン語のようなヨーロッパの言語からアフリカ・南北アメリカ・オセアニア地域の言語まで、本人の興味により自由に選択できます。話者が数億人いるような大きな言語から、話者数の限られた危機言語まで研究することができます。また、音声言語だけでなく手話を研究したり、ラテン語やサンスクリット語のようにある程度の言語資料を残したまま母語話者がいなくなった言語を研究したりすることも可能です。研究対象だけではなく研究方法にも様々なものがありますが、将来どのようなアプローチをするにせよ必要となる基礎的な研究方法の訓練を受け、そういう訓練を通じて、自分に最も適した分野を自ら選んで行くことになります。

哲学・文学・歴史などの分野に興味のある人は、専修課程に進学する前

に、ある程度自分で専門書を読んで既に予備的な知識を身につけていることが多いでしょう。しかし、言語学に関して、それはなかなか困難です。本屋などで手に入る書物で言語学について独学した人は、実際に言語学専修課程で学び始めると、それまでに抱いていたイメージの変更を余儀なくされると思います。これには色々な理由が考えられますが、上述の「言語を科学的な研究対象として扱う」ような研究の書籍は、しばしば流通ルートに乗りにくく、したがって、それを目にする機会も少ない、ということが一つでしょう。それでも最近では言語学の専門書を一般の書店で目にする機会もふえましたが、言語を研究対象として扱うための前提や手続きにまで立ち戻って基本的な知識を与えてくれる本は少なく、特定のテーマを扱うものに限られる傾向があるようです。また、全国の大学で、言語学を専門課程として持つところがまだ必ずしも多くないことも、言語学的知識の普及に障害となっています。そういうわけで、言語学専修課程に進学する学生は、ほぼ全員が白紙の状態からスタートする、といっても過言ではありません。

(2) 言語学専修課程を卒業するために必要な科目と単位

言語学専修課程では、「言語学概論」、「音声学」、「比較言語学」の3つの講義を必修科目としています。言語学概論は言語学の基本的な考え方と、音声・音韻・文法・意味など言語学の諸分野の基礎知識を与えるものです。音声学は世界の言語で用いられる様々な言語音を聞き取り、発音し分け、また正確に記述する方法を学ぶ授業です。比較言語学は、言語学のうちの重要な分野のひとつである通時的な言語変化を扱います。これらの必修科目のうち、「言語学概論」、および「音声学」は持ち出し専門科目（前期課程2年生も履修することができる文学部の専門科目のことで、後期課程進学後の単位となります）として、2年生のAセメスターに本郷キャンパスで開講されますので履修するようにしてください。（「音声学」は、3年生のSセメスターにも開講されます。）なお「比較言語学」も持ち出し専門科目なので、希望者は2年生のAセメスターに本郷キャンパスで履修することができます。

言語学専修課程を卒業するためには、まず、これら必修の3科目のほか、「言語学演習」が8単位必要です。その際、必ず6ターム（3セメスター）

以上取る必要があります。これに加えて、「言語学特殊講義」を 12 単位、その他に文学部（言語学専修課程のものを含む）ないしは他学部の授業から 36 単位を取らなければなりません。

なお、一部の「言語学特殊講義」は 2 年生のうちから履修することができます。令和 6 年度の持ち出し専門科目は次のとおりです。「認知文法入門(2)」「国語学概論 I」「国語学概論 II」。これらのうち、「認知文法入門(2)」以外は言語学以外の専修課程の授業として開講されますが、言語学専修課程の単位としても認定されます。

さらに、卒業のためには、以上に加えて、「卒業論文」または「特別演習」による 12 単位が原則として必要です。卒業論文は、単に読んだものをまとめるというだけでは不十分で、最初に述べた「言語の科学的研究」によって、言語学に何か新しい知識をもたらすものであることが期待されます。最近の卒業論文のテーマの例は以下のとおりです。

- スペイン語の叙述補語構文について、前置詞選択を中心に
- 韓国語の語尾-essessess-に関する分析—語尾-essess-との比較を中心に—
- コーパスから量的に捉えるペルシア語の軽動詞構文における前部要素の並列と分離可能性
- 会話分析を用いた制度的場面『漫才』の質的研究—オズワルド「友達」を事例として—
- インフォーマルな書き言葉における仮名の送られ方
- 家庭内の会話における日本語と英語のコードスイッチング研究
- 現代語における動詞「終わる」「死ぬ」の意味拡張
- 所謂「覚え書き」に代表されるソシユールの前半生における印欧祖語研究が「一般言語学講義」に対して及ぼした影響について
- 日本語ラップの韻に関する考察
- 補助動詞「イタダク」とガ格の共起について
- 古代ギリシア語諸方言における R 音化について
- イロカノ語重複法の音韻的分析
- 辞書の空き間になっている表現“有無を言わず”の研究
- Omission of Subjective Case Particle in Spoken Language of Modern Korean: Focusing on Nouns muo/mwo, got/go, sigan
- 現代文学と比較した近代文学らしさ—受動文の計量的比較から—

- 富山県射水市方言における「が」の発音について

「特別演習」は文献精読、言語調査、言語データ分析等の課題から3つを選んで行い、言語学の基礎的な知識や方法論の修得度を審査します。

言語学専修課程に進学した学生は、あまり狭く専門を限ることなく、なるべく広範囲の授業を受け、演習に参加することが望まれます。これは、繰り返しになりますが、ほとんどの人にとって言語学を学ぶのが初めての経験であるため、特に、大学院に進学しようとする場合には、少なくとも言語学の代表的な分野について、基礎的な知識を持っていることが不可欠です。

(3) 教員の専門分野

言語学専修課程の教員はそれぞれ専門を異にしており、認知言語学をはじめとする理論言語学、フィールド言語学、歴史・比較言語学、言語類型論、印欧語、オーストロネシア語族、シナ・チベット語族、ドラヴィダ語族の研究など、その専門分野はさまざまです。

また、多岐にわたる言語学の諸分野をできるだけカバーするために、言語学専修課程以外の教員の授業科目を、必要な範囲で、「言語学演習」または「言語学特殊講義」として認定するほか、毎年数人の非常勤講師を他大学からお招きして、言語学特殊講義を開講しています。参考のために令和5年度と令和6年度の非常勤講師の授業の例をあげますと、令和5年度は「バントウ諸語研究」「太平洋の言語の形態音韻論」「名詞句の認知意味論と認知語用論」「ドラヴィダ語比較研究: ブラーフイー語」が、令和6年度は「東南アジア大陸部諸語研究」「社会言語学」「言語の対照研究」「Topics in Cognitive Linguistics: Digital and Non-digital worlds」「Sociolinguistic Approaches to the Languages of Japan」が開講されています。また、前期課程で言語学に親しむ機会を提供するため、総合科目「言語文化論 言語の多様性から考える言語学」を教養学部で開講しています。

(4) 進路その他

学部卒業生の進路の割合は毎年様々ですが、最近では約2割が大学院進学を目指し、残りが社会に出る道を選びます。就職先は、公務員・教員・放送・出版・一般の商社など、どの専修課程にも共通する分野に加えて、情

報技術や出版のように、多少言語学と関係する業種も以前から見られます。大学院に進学した学生の中には、それぞれの選んだ言語の研究や言語学の特定の分野の研究のために、外国留学する者も毎年出ています。

最後に、「学生室」の活用ということを強調したいと思います。言語学専修課程の授業の大半は、コロナ禍以前には文学部 3 号館 6 階の言語学演習室で行われていました。同じ 6 階には、助手室と並んで、学生が勉強のために使える学生室があり、ここには各種辞書、新着雑誌、コピー機、プリンタ、スキャナ、数台のパソコンや録音機器などがあり、自由に利用できます。

教員・学生の研究・教育活動やさまざまな行事は、言語学研究室の Web ページ <http://www.gengo.l.u-tokyo.ac.jp> で見ることができます。なお、言語学研究室の Web ページには進学に関する情報も掲載されています。ぜひ参考にしてください。

学生室はまた、日常的に同輩・先輩・後輩が交流して自由に情報交換をする場でもあります。基本的な文献の探し方や機械類の使い方を教わることもできるでしょうし、興味の方角を異にするもの同士の会話から啓発されることも多いでしょう。なお、教員の研究室も同じ階にあるので、学生は適宜容易に指導が受けられます。学生室を中心としたこのような学生生活は、教養課程との大きな違いであり、積極的な活用が期待されます。